

## 2. 主語不要論について

金谷氏の文法論の骨格は、主語不要論、視点論、自動詞・他動詞論に大きく分けられる。主語不要論は、三上章の主張を継承し、「は」と「が」の(疑似)問題を解明しようとするものである。視点論は、「神の視点」と「虫の視点」という観点から、日本語と英語の文法現象を対照させるものである。これは、英語が「する」言語、日本語が「ある」言語であるということともかかわってくる。また、自動詞・他動詞論は、自動詞・他動詞の形態対立を「する」(人為)対「ある」(自然)という形で、明快に示したことは画期的である。

まずは、主語不要論について触れる。主語不要論の論拠は、三上章がほとんど明らかにしているので、ここでは繰り返さないが、金谷氏の業績は、その後の主語必要論に関して、明快に批判していることだ。この点を私なりに補足し、金谷氏が批判していない強力な「主語絶対論者」である尾上圭介氏の論を批判的に検討する。

## ●尾上圭介氏の主語論

金谷氏は、その他、仁田義雄氏などの主語擁護論についても批判しているが、私は「主語はない」「場所はある」という論文で、主に、尾上圭介氏の「主語論」について批判した。尾上氏の文法論には、私もかなり影響を受けたが、その中で「主語の絶対性」をいう尾上氏の論にはかなりの違和感を持った。それでこの論を全面批判する論文を書いたわけである。尾上(2004)の場合は、山田文法を継承する伝統的な国語学の立場からの主語論である。主語と述語との統一から文が成り立つという伝統的な見解に立っているわけであるが、多分に哲学的な原理論がその背景にある点、その原理的背景を批判しなければ、その主語必要論は批判できないと思われる。

まず、尾上の主語の規定であるが、尾上は柴谷らの「述語の尊敬語化」や数量詞遊離などは、主語の動詞支配というような統語的規定の根拠にならないと明確に批判しており、この点は金谷と意見を同じくする。しかし、その結論として、結局、残るのは、形態上の観点のみであるとし、「ガ格に立つ項が主語である」としてしまったことは、大きな問題性を持っているといえるだろう。

次に、尾上は、主語の内実を語る。「月は(が)まるい」と言う時、「月」について「まるい」ということを語る。「猫がねずみを追いかけている」という時、登場人物は複数あってもそのうちの「猫」を状況描写の中核項目として、「猫」の運動として語る。「モノを中心として、基盤としてこそ、事態は認識される。そのような事態認識

の中核項目ないし基盤が主語なのであり、事態を語る言語形式としての文に(意味として)主語というものが必ずあるという理由もここに求められる。」とする。

しかし、逆の見方もあるのである。何かが走っているという事態の認識が先あって、それからその何かは析出するという事態認識がありえるし、むしろその方が根源的ではないだろうか。たとえば、「雨が降る」「湯が沸く」のように、降雨という事態以前に「雨」という実体は存在しないし、「沸く」という事態以前に「湯」という実体も存在しない、そのような文もあるのである。また、幼児の事態認識は、漠然とした事態が先に認識され、そこから普通名詞で呼べるようなモノの認識があとでおこなわれる、という報告が見られる。モノ的世界観に対し、これはコト的世界観と呼ばれる。これは哲学者の廣松渉が唱えたものであり、ソシユールの言語観もそのようなものであったという。モノ的世界観からは、主語=モノが、述語=コトに優位に立たざるを得ない。後で述べるが、主語論理から脱却するためには、コトの世界観に立つ以外ないであろう。尾上は、主語の内実を次のようにまとめる。

一文の内容を認識の側面で言えば、事態認識の中核項目、認識の対象が主語であり、その対象について認識する内容が述語である。存在の側面で言えば、状況の中に中核として存在するものが主語であり、その在り方(運動も含めて)が述語である。

要約すれば、主語の内実は、認識の側面で言えば「認識の対象」であり、存在の側で言えば「状況の中に中核として存在するもの」ということになる。例を挙げれば、「鯨は哺乳動物である」という文は、「鯨」は「哺乳動物として存在する」という主語の存在の仕方を語る文である、とする。これこそ、主語を中心に主語の属性として物事を語る「主語論理」にほかならない。これに対する「述語論理」(述語が主語を包含する)という見方がありうるのである。

尾上は、「本質的な意味で述語文といえる文、すなわち平叙文と疑問文においては、意味として主語(主格語、ガ格語)を持たない文はない。」とし、「在り方を承認する文において、その在り方をもって存在するもの、認識の対象がないということはありません。」と、主語項の絶対性をいう。

しかし、「すべての文に主語がある」というのは、事実と反する。主語(ガ格語=認識の対象)がない文がありえる。それは、尾上がいう「寒い」「曇っている」「涼しい」「明るい」などを述語とする文(気候・天候・体感温度・明るさの文)、いわゆる無人称文である。尾上はこのような文について、「そのような在り方で存在するモノが指摘しにくい場合もあるが、そのような場合には事態発生を事態認識の基盤として主語に立てることになり、やはり主語を持つことになる」としている。

しかし、事実として「寒い」はそれ自体で文であり、主語はない。状況全体を体感してそれを表出する文であり、認知主体は状況(場)の中にあり、しかも言語化され

ない。「私は寒い」とは普通言わない。「札幌は寒い」では、「札幌」という場所の属性を述べた文になるだろうが、ここで問題にしているのは、今、この現場で発話者が体感して発する文である。尾上は「ここは寒い」の「ここは」が主語であるとするのであるが、これは状況語(=場所)であり、主語ではない。寒い戸外に出たときに発する言葉として「ここが寒い」は明らかにおかしい。「ここが寒い」などとガ格が現れる発話は特殊な文脈を考えなければ出てこないものであり、これを「主語」とはできないだろう。また、「今日は寒いね」という発話は日常よく出てくるが、この「今日は」(広義の場所(状況)としての時間)が「主語」になるのであろうか。「今日が寒い」のようにガ格が出てくる表現は特殊である。英語の場合は場が主語になりうるとしても、日本語でもそうかは疑問である。いつの間にか、存在するモノが主語であるという定義が、場にも拡張されているが、主体(話し手)を取り巻く環境としての場所は、主語にはなりえない、と筆者は考える。

(19) もう12時です。

(20) しずかですね。

(21) やっと春になりましたね。

のような文も同様であり、「今はもう12時です。」「この辺りは静かですね。」「この辺りはやっと春になりましたね」の「今は」「この辺りは」は状況語(場所)であって、主語(存在物)ではない。ガ格が現れても特殊な文脈でしかいわないのであって、「?今がもう12時です」「?この辺りが静かですね。」「?この辺りがやっと春になりましたね」「??今日がいい天気ですね」のような文は筆者には非文に思われる。

「寒い」という発話では、場所全体が寒いのであり、その「寒い」ことを認知主体が体感しているのであって、場所の属性を述べた文ではない。ここでは、「どこが寒い」といった中核的対象が見られないのである。このように、認知の中核的対象がなく、認知主体がいる漠然とした状況全体を感じる文は主語がないといわなければならない。この文は、「(現)場」が文になったものといえるだろう。場=述語である。次のような文も主語はなく、漠然とした場の雰囲気<sup>1</sup>を述語化したものである。

(22) 今日はなんとなく気だるい。

(23) 最近、退屈だ。

(24) (雨が降って)憂鬱だ。

無人称文の他に主語のない文としては

(25) 警察では犯人を捜している。

(26) 私からやります。

などがあるが、尾上の定義では、上の傍線はガ格項ではないので主語がないことになる。これを無理に「警察が」や「私が」というガ格にして動作主として解釈する必要はないのであって、デ格やカラ格は明らかに場所をあらわしているのであり、この文では動作主体はないのである。

尾上の主語論は、原理的に川端善明の主語論に依拠しているといわれる。それで、ここで川端の主語論について一言言及しておきたい。

文は判断に対応する。(中略)判断に直接対応し、内部的に二項の対立構造を先ず持つ文の、その二項が、私の意味における主語と述語である。主語と述語のダイナミクスにおいてその文は語り、(私)は語る。(川端2004:62)

「知られるべき対象」対「知る働き、知る内容」という判断の二項的な構造に対応する第一の項が主語で、第二の項が述語である、という川端の主語—述語論は、依然、主観と客観の対立を前提とする認識論に立っており、存在論としては、存在者(モノ)を基盤とする存在論に立っていると考えられる。川端の主語—述語論は、文を主辞と賓辞の統覚作用による統一によるとする山田孝雄の文観に由来すると考えられる。これに対し、時枝誠記(1941)は次のように指摘している。「一般に、主語格は述語格に対立したものと考えられ、この対立を結合する所に統一が成立するという形式論理学並びに印欧語的統一形式の観念から離れなければならない。国語に於いては、主語は述語の中に含まれる形に於いて述語に対立していると見なければならないのである。」(時枝1941:370-371)

尾上の主語論の中での功績は、さまざまな意味役割を持つガ格項のスキーマを「事態認識の中核項目」であるとして統一的に説明したことであり、筆者もそれを支持するものである。しかし、「ガ格項が主語である」としたことには、最後まで納得できなかった。また、情意文や出来文において、情意の場や事態生起の場という場の概念を導入して説明したことに対しては、積極的に支持するものであるが、その場がなぜ主語にならなければならないのかは最後まで理解がいかないのである。結局、尾上が依拠する川端の主語論—「知られるべき対象」対「知る働き」という判断の二項構造に対応する主語—述語—という論をベースにしているため、「主語論理」から抜け出せないのであると考えられる。すべての文に主語がある、というのは事実と反するのであり、「寒い」という一文がその反例を突きつけている。この文は判断に対応する文ではないし、ガ格項はなく、表れても「ここは」などの場所であって、主語ではない。このような文は、認知主体をとりまく場を体感し、それを表出する文であるので「場の文」である。述語の承認と場の承認が一致する文なのである。ここには、「主語」はなく、「場所」があるのであって、場があるから主語はいらないのである。三上章や金谷氏の論も「主語不要」とするのはいいが、ただガ=主格補語、ハ

= 主題というだけでは、尾上のような原理論としての主語論への反論はなかなかできないのではないか。「主語の論理」に対してはそれに代わる「場所の論理」を明確に打ち出すことが肝要であると考ええる。